Ⅲ　七つの命題
—キリスト教ヒューマニズム—

ペトロ・ネメシェギ

『大学案内』をはじめ上智大学の関連文書には「キリスト教ヒューマニズム」という言葉がよく出ます。上智大学のあらゆる営みの方向づけ、上智大学の教育の基本理念を指すキーワードとも言えます。それほど重要な用語なら決して空疎にしてはいけません。在学生はもちろんのこと、大学関係者の誰かが、この語の意味内容について、「しっかりした説明を聞いた覚えも、自分の中でじっくり吟味した経験もない」と言うとすれば、上智大学は、やらねばならない何か大切なことをし忘れている、ということになるでしょう。

そこで、本稿では、「キリスト教ヒューマニズム」について、以下のような展開で、説明を試みてみます。まず、「キリスト教」付きの「ヒューマニズム」という言葉の成り立ちに留意した上で、その聖書的な源泉を確認します。次に、種が発芽し、生長し、開花し、結実するごとく、それが確固とした思想へと練り上げられていった道筋を辿ります。最後に、その中身を、明確な内容をもつ七つの主張あるいは命題として提示しましょう。

1　聖書に見るヒューマニズムの源

ヒューマニズムと無神論

「ヒューマニズム」という語について、『小学館ランダムハウス英和大辞典』には、「人間主義」、「人道主義」、「人文主義」という三つの訳語が載せられ、説明として、「人間的趣味・価値・品位・尊厳がその中心となっている思考（行動）様式」と書かれています。このような一般的な定義をもつヒューマ

ニズムという語に「キリスト教」という形容を添えるのは、いささか意外なことに思えます。というのは、宗教においては、人間ではなく神か仏、つまり人を超える存在が中心にされるべきだと思われるからです。事実、その理由で、キリスト教の歴史においても、かなり多くの人々が、神中心であることを明らかにするために、人間的な事柄を中心とするヒューマニズム思想を排斥しました。キリスト者の間に広まっていたこのような考え方に反発して、ヒューマニズムを主張するためには、キリスト教を退け、神を否定しなければならない、と主張する人々が19世紀に現れたことはよく知られています。この無神論的なヒューマニズムを提示する人々の代表者として、フォイエルバッハ、マルクス、ニーチェなどの名を挙げることができるでしょう。彼らの考えをニーチェ風に表現すると、人間を立てるためには、神を殺さなければならない、ということになります。

このような無神論的なヒューマニズムが、19世紀から20世紀にかけて世界的な運動になりました。しかし、ニーチェの思想からナチズムが生じ、マルクスの思想からスターリン主義が生じて、無数の人の命を奪う人間否定に発展していったのです。このようにして、無神論的ヒューマニズムが色褪せていく流れの中で、ヒューマニズムを新たに基礎づけ、それとキリスト教との関係を考え直さなければならない、という必要性が痛感されるようになりました。

聖書とヒューマニズム

聖書には、ヒューマニズムの源となりうる言葉が多く含まれますが、その中から、最も重要な四つの言葉を引用します。

(1) 「神はご自分にかたどって人を創造された」(創世記１章27節)
(2) 「神は、すべての人々が救われて真理を知るようになることを望んでおられる」(テモテへの手紙一　２章４節)
(3) 「言（みことば）は肉（人間）となって、わたしたちの間に宿られた」(ヨハネによる福音書１章14節)

(4) 「その一人の方（イエス・キリスト）は、すべての人のために死んでくださった」(コリントの信徒への手紙二　５章15節)

この四つの言葉がヒューマニズムとどのように関係しているかを考えてみましょう。第１の言葉によれば、人間、しかもすべての人間は「神にかたどって」、すなわち神の像（imago Dei）として、神ご自身によって存在と命を与えられています。永遠の神ご自身が人間の存在価値を肯定されるのです。この神の意志は、人類のあらゆる災いや罪よりも強く、第２の言葉で言われているように、あらゆる人間を死と罪から救うことを望んでいる神の意志として永久に存続しています。この神の意志の実行として、第３と第４の言葉で言われているとおりに、神の言である永遠の御独り子が人間となり、すべての人のために命を献げて死んだのです。聖書の中で、イエスの死は、いつもイエスの復活、すなわち死のかなたにあるイエスの新しい命と結び付けられています。人間のために死に、人間のために復活し、人間として神の永遠の命にあずかっているイエスの存在は、神がすべての人間を愛しているという事実をはっきりと示しています。

聖書に見られるこのような考えは、確かに、すべての人間の価値を認め、かつ育てる思考・行動様式の源になりえますが、同じ聖書の中には、ヒューマニズムと縁のないような言葉も多々見受けられます。ですから、以上の四つの言葉で表されている聖書の根本的な教えからキリスト教ヒューマニズムが大きな木として成長するためには、かなり長い時間を必要としたのです。そこで次に、キリスト教の歴史におけるヒューマニズム思想の歩みを見渡してみましょう。

2　キリスト教の歴史に見られるヒューマニズム

キリスト教ヒューマニズムの登場

キリスト教思想史をみると、早くも、古代ギリシアのキリスト教神学者たちの思想において、ヒューマニズムのような考え方が現れたことがわかりま

す。2世紀の神学者エイレナイオスは、人類の歴史の全体を、最初の人間から世の終わりまで続く、神の慈しみによって導かれる一貫した人間救済の営みと見なしました。神は、人間に恵みを与えるために人間を創造し、罪を犯して死の運命に服した人間を救うために御子と聖霊を遣わし、アダムを初め、すべての人を、イエス・キリストという唯一の頭の下に一つに集めようとなさいます。神のこの営みは、人間たちを「永遠の命」へ導く過程です。事実、「生きている人間こそ神の栄光」なのです。エイレナイオスのこの断言は、キリスト教ヒューマニズムの合言葉と言えるでしょう。それによれば、「神の栄光」となるのは、神をほめたたえたり、賛美したりすることよりも、神によって生かされている人間として生きることそのものなのです。したがって、人間を小さく見せたり、その能力を否定したりすることではなく、あらゆる面で人間の命を育むことが、神の栄光となります。もちろん、エイレナイオスとともに、神との正しい関係こそ人間が真に生きるために必要不可欠である、と心に銘記した上でのことです。事実、上に引用した彼の言葉に続くのは、「人間の命、それは神を見ることだ」という断言です。

ヒューマニズム的な思想をもっているもう一人のギリシア神学者として、3世紀のオリゲネスの名を挙げることができるでしょう。彼は宇宙全体の歴史を、善良な神による全人類の教育過程として理解しました。自由意志をもつものとして創造された人間たちは、この教育を受けて、自由に善を選び行うようになります。死後も続くこの教育的な浄化過程によって、ついには、すべての人間が善を選び、善である神と一致して生きるようになるのです。オリゲネスはこの万民救済のことを、断言としてではなく、希望として述べているのですが、万民救済という大きな希望を、彼だけでなく、ニュッサのグレゴリオスなど、他のギリシア神学者たちも抱いていました。

ところで、ラテン神学者アウグスティヌスになると、このような楽観的でヒューマニズム的な思想は影が薄くなります。彼によれば、原罪に汚染された人類は、神によって断罪され、情欲に走る悪の塊であり、正しく愛することができない人々のうちから、神が、ある者たちを選び、聖霊によって彼らの意志を動かして回心させ、永遠の命を得るように予定したこの人々を、愛

と命に導くのです。「教会以外に救いなし」という公理はアウグスティヌスの思想において非常に厳しい意味をもつことになりました。異端者たちを国家権力によって教会に入るように強制するという彼の考えや、キリスト教以外の宗教の実践をキリスト教を国教とする国の市民に禁じるべきであるという当時の人々の考えは、このような思想の自然の産物と言えるでしょう。人間とその歴史における罪の闇についての彼の鋭い眼差しや深い洞察が不朽の価値を有する一方で、これは、すべての人間に共通の人間的な事柄を中心にするヒューマニズムとは程遠い考え方だ、と言わざるをえないでしょう。

このような思想の影響を大いに受けた西欧中世では、ヒューマニズムが栄えるのは困難でした。その社会は、個人の権利や自由よりも社会や教会の制度や規律を重視し、教会が説く教理から逸脱する人々を異端審問にかけたり死刑に処したりし、封建社会の秩序を守ることを人権を守ることに優先させました。したがって、ヨーロッパのキリスト教的な中世社会にはキリスト教的なヒューマニズムが欠如していた、と言ってもいいでしょう。

キリスト教ヒューマニズムの再興

ギリシア神学者にすでに芽生えていたキリスト教的なヒューマニズムが再び開花するきっかけとなったのは、15、16世紀のルネサンス時代に起こった古代ギリシア・ローマ世界の再発見でした。プラトン、アリストテレス、ストア派などのギリシア哲学者の人間理解や人間の身体美を称える古代美術の再発見は、ヨーロッパの中で、人間的価値・品位・尊厳に焦点を合わせる思想を生みます。当時のヒューマニストの一部は、人間を称えるためにキリスト教を退けましたが、ニコラウス・クザーヌス、トーマス・モーア、エラスムスなど、深いキリスト教的な信仰を保ちながらも、それを人間の尊厳と価値を強調する思想と結び合わせた一連のヒューマニストたちも現れます。彼らはイエスに対する篤い信仰をもち、イエスが福音書で説いた生き方を身につけようとし、金銭欲と権力欲に凝り固まった当時の教会の改革を強く要求しながら、対立、争い、分裂などを極力避けたのです。この人々は、当時キリスト教諸国を激しく襲ったイスラム教徒にさえ、静かな対話と理性的な説

得によって近づこうとしました。したがって、15、16世紀は、キリスト教的なヒューマニズムのすばらしい春の時代でしたが、残念ながら、その後の歴史は、彼らの思想には従いませんでした。

16世紀に起こったプロテスタントの宗教改革は、一方では、教会の支配に対してキリスト者の自由を強調する点でヒューマニズム的でしたが、他方では、原罪によって堕落した人間の無力を強調し、救済予定論を教え、人間が自由意志によって神の恵みと協力しうることを否定するという点では、ヒューマニズムと疎遠だった、と言えるでしょう。

カトリック教会は、宗教改革によって引き起こされた教会分裂のショックを受けて、教会と国家の権力を使って、残った信者たちを教会の指導に従わせようとしました。当時の教会は信教の自由を認めず、宗教戦争に賛成し、教会の教えとは異なる内容の書物を読むことを信者に禁じたのです。トリエント公会議によって改革されたカトリック教会は、16世紀以降、世界的な宣教活動を繰り広げて、効果を上げましたが、西洋キリスト教の文化と異なる文化から何かを学ぼうとした宣教師たちの試みを排斥することもありました。ヒューマニズム的とは言いがたいこの時代にも、人間の理性、意志、感情を調和的に発達させることを目指すイエズス会学校の教育制度や、17世紀のフランスに見られる、芸術、文学などを積極的に評価するいわゆる「敬虔ヒューマニズム」の霊性運動がある程度までヒューマニズム的な要素をもっていましたが、この時代のキリスト教を全体として見ると、それはヒューマニズムを育てるようなものではなかった、と言うべきでしょう。

キリスト教ヒューマニズムの浸透

18、19世紀の啓蒙思想、フランス革命の思想、自由主義思想において、ヒューマニズムの思想が復活しますが、キリスト教の内部でそれが大いに開花し、カトリック思想の主流となったのは、20世紀のことです。

この点で先駆者の役割を果たしたのは、フランスの哲学者ジャック・マリタン（Jacques Maritain）でした。彼の著作『Humanisme integral（まったきヒューマニズム）』に表された考えは、当時教会内で危険思想と目されま

したが、間もなくカトリック教会の最高指導者たちによって唱えられるようになります。この点で教会の姿勢を変えたのは、ローマ教皇ヨハネ23世でした。彼が発布した『地上に平和を（Pacem in terris）』と題する回勅は、教会の歴史において初めて、カトリック信者にだけではなく、「すべての善意の人に」あてて書かれた書簡です。どの宗派や政党に属する者であっても、すべての人を父親的な愛情をもって迎えたこの教皇は、教会の閉鎖的で排他的な姿勢を打破したのです。彼の死のニュースを聞いたイタリアのあるバス運転手が述べた言葉は、この教皇が人々に与えた印象をよく表しています。「この教皇は、わたしたちが人間であることをわたしたちに感じさせたのだ」と。まさに、そのとおりです。

同教皇が開いた第２バチカン公会議はヒューマニズム的な思想をはっきり打ち出しました。キリストがすべての人間と一致していること、聖霊がすべての人間の心の中に働いていること、信教の自由を含めてすべての人間の人権が尊重されるべきこと、すべての人間の喜びと悲しみがキリストの弟子の心に響くこと、あらゆる民族の文化を尊重し、その価値をキリスト教に受け入れなければならないことなどを宣言したこの公会議は、ヒューマニズムの精神に溢れています。

公会議後の教皇たちも、同じ思想を説いています。1981年に来日し、広島の平和記念公園慰霊碑前から「戦争は人間のしわざです。戦争は人間の生命の破壊です。戦争は死です」と日本語で訴えた前教皇ヨハネ・パウロ２世の平和メッセージは今も多くの人の心を打ちます。人間の悲惨を共に直視しようと促す同教皇は、人間の偉大な尊厳を前にして感じる驚きこそ、キリスト教が現代に提供する優れた貢献である、と確信していたのです。この驚きを強調して、同教皇は、すでに、彼の最初の回勅の中で、「実は人間の価値と尊厳に対するこのような大きな驚異が福音、すなわちよい知らせと呼ばれています。それはまたキリスト教とも呼ばれています。この同じ驚異が世界における、なおのこと“現代世界における”教会の使命の発端となっています」（教皇ヨハネ・パウロ二世回勅『人間のあがない主』カトリック中央協議会25頁）と言っています。

3　キリスト教ヒューマニズムの七つの命題

1．存在そのものは善である

キリスト教ヒューマニズムの歴史について大まかに述べたところで、聖書や第2バチカン公会議に従って、このヒューマニズムの内容を七つの命題にまとめてみましょう。

まず、キリスト教ヒューマニズムの第1の命題は、存在することは善いことである、という主張です。存在すること、特に人間として存在し、生きることは、価値があり、意義があることです。ですから、いっそう豊かに生き、成長し、進歩することも、善いことなのです。存在と命は、否定され破壊されるべきものではなく、肯定され育てられるべきものです。キリスト教において、この存在肯定の思想は、神の愛による世界創造の信仰に基づきます。旧約聖書の続編に属する『知恵の書』の次の言葉は、このことを見事に表しています。

「あなたは存在するものすべてを愛し、お造りになったものを何一つ嫌われない。
憎んでおられるなら、造られなかったはずだ。
あなたがお望みにならないのに存続し、
あなたが呼び出されないのに存在するものが果たしてあるだろうか。
命を愛される主よ、すべてはあなたのもの、
あなたはすべてをいとおしまれる。」（知恵の書11章24-26節）

全能永遠の神の愛がすべてのもの、特にすべての人間を包んでいるという確信は、誰をも除外しないヒューマニズムの究極的な源であり、支えです。

2．人間は神の像である

人間が神の像として創造された、という思想は、キリスト教ヒューマニズムの第2の命題です。神の像である以上、どの人間も、目的であり、決して手段として利用されてはなりません。神の像という尊厳は、すべての人間に属します。国籍、人種、性別、階級、経済力、学問、健康状態などを一切問わず、各人は、粗末に取り扱ってはならない尊ぶべきものなのです。

神の像としてすべての人は、本質的に平等です。確かに、才能、体力、知能、家柄などの点で、人々の間には差があります。しかし、人間として存在しているという点で、すべての人は平等であり、同様に人権を有しています。

このような考えに基づいて、キリスト教ヒューマニズムは、人々の間の貧富の差、権力の点での過度の差がないように努力することを要求します。ですから、第2バチカン公会議も、大地主によって土地の大部分が占有されている国々で貧しい農民に土地をもたせる農地改革を促進することを強く勧め、政治体制として、全国民を政治に参加させる民主主義を、現代社会にふさわしい制度として高く評価しています。教会はもはや国家権力から特権を要求せず、すべての人間に信教の完全な自由が認められるように要求します。真理に到達することは、強制の結果ではなく、人間の自由な探求の結果でなければならないからです。

絶対に侵害してはならない人権がすべての人間にあるという考えの究極的な源は、絶対者である神が各人を永遠に存続する命をもっている人格として存在させ、各人のこの存在を、目的と見なしているということです。「神の栄光のためだ」ということを口実として人間を殺したり、投獄したりしてはなりません。「生きている人間こそ、神の栄光」だからです。このように、人間の尊厳の絶対性は、神の絶対性に基づくのです。

3．全面的な人間陶冶

キリスト教ヒューマニズムの第3の命題は、全面的な人間陶冶の主張です。他の生き物と同様に、人間は時間の中に生きており、時間の中で次第に自分自身を作り上げます。人間は多くの可能性をそなえたものとして生まれますが、教育、学習、訓練などによってそれらを発達させなければなりません。存在の価値を認め、豊かに存在することは善いことである、と信じてい

るキリスト教ヒューマニズムは、一生涯続く養成の必要を明言します。

人間陶冶に関しては、キリスト教ヒューマニズムは、人間のすべての側面の調和的な養成を、特に強調します。人間には、理性、意志、感情、身体があり、それらすべてが発展させられるべきなのです。理性に関しては、必要な知識を得、自国民の文化や人類の文化の中で培われてきた諸価値を知り、健全な判断力を身につけ、創造的な知性を育てる必要があります。意志に関しては、徳を身につけ、自然に正しいことを選び実行する姿勢が育てられるべきです。感情に関しては、豊かな感受性を育み、美を評価し作り出す能力を育てる必要があります。身体に関しては、体育によって身体を鍛える必要があります。結局、人間は、真、善、美の世界との接触によって、人間として育つのです。真理に接することによって人は正しい認識を得、合理的に考える能力を育てていきます。善に接することによって人は美徳を身につけ、誰も見ていなくても自発的に喜んで正しいことを行うようになります。美と接することによって、人は、利害によって支配される世界から解放され、所有欲と無関係な喜びを経験するのです。

さらに、人間陶冶の場合、人間の最も深い次元、すなわち究極的なものとの関係を問題にする宗教の次元にも、大いに注目すべきです。存在そのものの意義を問うことは、人間の優れた能力です。人間性の他のあらゆる側面を発達させ、この最も重要な側面を未発達のままに残すことは、人間性を歪めてしまうことになります。

第2バチカン公会議は次のように言っています。「わたしたちは、人間の尊厳、兄弟的交わり、自由など、すなわち、人間の本性と努力のすばらしい実りであるこれらすべての価値あるものを、キリストの霊に結ばれて、またキリストの掟に従って、地上に普及させた後、それらをあらゆる汚れから清められたもの、照らされ変容されたものとして、キリストが永遠普遍の国を御父に返すときに、再び見いだすであろう」(『現代世界憲章』39)。これは、人間陶冶の永久的な価値を主張する、キリスト教信仰に基づく言明です。

4．人間に人間を啓示するイエス

キリスト教ヒューマニズムは、キリスト教的である以上、その中にはイエス・キリストが中心的な位置を占めています。まず、第1に、人間イエスの姿を見れば、神の像として生きている人間の生き方がはっきり見えてきます。他者のために生き、他者のために死んだイエス、人々からすべてのこと、善いことも悪いことも受け入れて、すべてを赦したイエス、父なる神を愛し、常に神の心に従い、すべてを信頼をもって神の手から受け入れ、神にことごとく自分の命を委ねたイエス、十字架上で死ぬときに愛の頂点に至り、死のかなたに復活した人間として神の懐において生きているイエス、このイエスは、神の像である人間の姿を完全に実現した唯一の人です。ですから、このイエスに倣うことは、神の像である真の人間になるための最良の道なのです。

第2に、キリスト教によれば、このイエスは、人間となった神たる御子であり、自分との一致によって人々を「神の本性にあずからせる」(ペトロの手紙二　1章4節)御方です。エイレナイオスは言います、「神の御子は、そのあまりにも大きな愛のゆえに人の子となられた。それは、人を神の子とするためであった」と。ギリシア神学者の間には、もっと大胆に、「神が人間となられた。それは、人間を神にするためであった」と言う者もいます。これこそ、生きている神が自由に与える最大の恵みです。その結果、愛の実践を伴う信仰によって、人間は神ご自身の命にあずかるようになるのです。

このことは、キリスト者にとって大きな恵みと希望ですが、第2バチカン公会議によれば、それは「キリスト信者ばかり」のことではありません。というのは、「聖霊は、神だけが知っている方法で、キリストの死と復活の秘義にあずかる可能性をすべての人に提供する」(『現代世界憲章』22)からです。この「神だけが知っている方法」についてあえてもっと詳しく語るなら、それを「良心に従う生き方」として説明することができるでしょう。良心について同公会議は次のように言っています。「人間は意識の奥底に法則を見いだす。この法則は人間が自らに課したものではなく、人間が従わなければならないものである。この法則の声は、常に善を愛して行い、悪を避けるよ

うに勧める。この良心は人間の最奥であり聖所であって、そこでは人間はただ独り神と共におり、神の声が人間の深奥で響く。この良心は、神と隣人に対する愛によって守られる法則を悟らせる」(同書16)。この世で実際に存在する人間たちの場合、この良心の声を、イエスの死と復活のゆえに人類に与えられている聖霊の働きとして理解することができるでしょう。それに促されて、大慈悲である神にすべてをゆだね、すべての人に愛を示して生きている人間は、そう意識せずとも、神の命にあずかっている、と言えるかもしれません。

もちろん、キリスト者の立場からすると、すべての人がこのことを意識し、イエスによって啓示された神の愛を明白に信じ、神に感謝する人々の集いに加わることは、きわめて望ましいことであるのも、そのとおりです。

5.「古き人間」からの脱却

人が神の像になりうるのは、神の愛と恵みによることですが、そのためには、人間の協力も必要です。これが、キリスト教ヒューマニズムの第5の命題です。「あなたがたは神に愛されている子供ですから、神に倣う者となりなさい。キリストがわたしたちを愛してくださったように、あなたがたも愛によって歩みなさい」(エフェソの信徒への手紙5章1-2節)。聖書のこの言葉は、神の愛によって人間に与えられた課題をきわめて適切に表しています。

このような課題を果たすためには、努力が必要です。聖書の言葉で言えば、各人の中に潜んでいる「古き人間」との闘いのための努力です。人間は自己中心的に生きる傾向があり、エゴイスティックな欲望を満足させようとする傾きをもっています。貪欲、権力欲、快楽欲に駆られて生きるように、あるいは反対に、怠惰に流れて、無気力になるように、人間は常に誘惑されています。欲望に支配されることも、怠惰に暮らすことも、「古き人間」の業であり、聖霊の指導に従うためには、聖書の言葉で言えば、この「古き人間」を「殺さなければならない」のです。

もちろん、この場合、人間が「殺す」のは、決して真に価値のあるものではなく、充分に成長していない人の未熟さだけです。人は人間として成長するためには、存在することよりも所有することを追求する姿勢に打ち勝たなければなりません。そのためには、克己、節制、忍耐などが必要です。しかし、最も必要なのは、ありのままの自分が神によって愛されている、ということを確信することです。人々がさまざまの欲望を満足させようと必死になっていることの理由と、何もやる気のないことの理由は、多くの場合、人が感じる不安です。神によって受け入れられている、という認識こそ、人をこの不安から解放するのです。

6. 他者のために生きる

人間は独りで生きているのではなく、神とともに、また他の人々とともに生きています。そして、人間は神と他の人々に向かって心を開き、神と人々を受け入れ、愛することによって、真の人間になります。第2バチカン公会議は次のように言っています。「愛の掟は人間完成と世界改革の根本法則である」(『現代世界憲章』38)。「特に現代においては、わたしたち自身がすべての人の隣人となり、わたしたちと出会うすべての人に行動的に奉仕する緊急な義務がある」(同書27)。「人間は、自分自身を無私無欲の気持ちで他人に与えることによってのみ、完全に自分自身を見いだすのである」(同書24)。

他者との対話、他人の身になること、イエスがわたしたちを愛したように互いを愛すること、これこそ神の像として生きる人間の在り方です。聖書が言っているように、「神は愛だから」(ヨハネの手紙一　4章8節)です。

さらに、人はただ他の人々だけではなく、大自然とも対話すべきです。人間はすべての生き物を、命を愛する神の輝きを映し出すものとして尊重し、その命を育てるべきです。神から人間に与えられた役割は、創世記1章に書かれた「地を従わせよ」(28節)という言葉よりも、創世記2章に書かれた、「神は人間をエデンの園に住まわせ、人がそこを耕し、守るようにされた」(15節)という言葉によってより的確に表されています。すなわち人間は、大自然の園丁であって、大自然を破壊せず、それが麗しい園、人間にふさわしい住まいになるように、育てるべきなのです。

7．神はすべてのものにまさる

以上述べた六つの命題は、人間的価値を中心とするヒューマニズムにふさわしいものとして容易に認められうると思われますが、キリスト教ヒューマニズムの第７の命題は、ヒューマニズムの命題としていささか奇妙に映るかもしれません。それは、神以外の一切のものに無限にまさる神への忠実を守るため、必要とあらば、神以外の一切のものを失うことを覚悟しなければならない、という主張です。キリスト教の信仰によれば、一切の有限のものを失っても、無限の神を失わなければ何の損害にもなりません。この確信を最もはっきりしたかたちで実行したのは、各時代の殉教者たちですが、溺れかけた人、あるいは電車のホームから線路に落ちた人を助けるために命を犠牲にした人々も、同じ確信を示しています。このような人々に当てはまるのは、イエスの次の言葉です。「自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのため、また福音のために命を失う者は、それを救うのである」（マルコによる福音書８章35節）。

イエスのこの言葉をもっと広く解釈して、「愛のために命を失う人はそれを救う」とも言えるでしょう。逆説的ですが、誰かを大いに愛しているから、その人を助けるために命すら惜しくないと思っている人こそ、生きがいを感じて、楽しく生きていきます。逆に、ヒューマニズムを口実として自分自身だけを守り、高めようとする人は、真の人間性を失ってしまうのです。

神はすべてにまさります。しかも、この神はすべての人の救いを望み、すべての命を愛する神です。この神の愛と合流して生きる人こそ、キリスト教ヒューマニズムを生きるのです。

本稿は、ペトロ・ネメシェギ師「七つの命題―キリスト教的ヒューマニズム」（ジャック・ベジノ編『現代とキリスト教的ヒューマニズム』（白水社、1993年）所収）から転載しました。

思索の基盤を深める

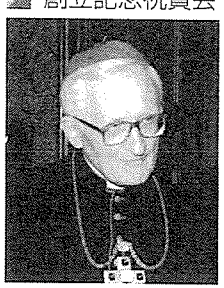
講演「人類の連帯―世界良心への訴え」

人生と世界史の究極の意味は何かという問いに、科学は、答えることができません。科学は、価値に関わる問題を、科学的過程の中身には属さないものとみなし、閉め出しがちです。ですから、どこに価値があり、究極の意味は何であるかという問いを提起しつづける必要があります。究極の意義とは何であるかをさとるのは、あらかじめ与えられた、人智を超えた真理を認める場合だけです。この真理に私たちが心を開くのは、信仰においてです。信仰は、むなしい信頼感ではなく、揺るぎなき真理との出会いです。

時代を超えて妥当する価値基準と、時代に制約された問題との統合が肝要です。「科学、技術、権力」が破壊的な不協和音を奏でることがないように、科学的・技術的な可能性と、その可能性の精神的・倫理的な制御との調和を図らなければなりません。地上を荒地に、人間を自動機械に、社会を誤った計画に翻弄される集団にしてはなりません。

1973．3．28　ケルン教区大司教　ヨーゼフ・ヘフナー枢機卿
（上智大学名誉教授）

創立記念祝賀会（ファミリー・パーティー）での挨拶



人類の一体性は三つの根本事実に基づいています。第一に、皮膚の色や国民性の違いにもかかわらず、人間は、「同一の人間性」において、本質的に一つに結ばれています。人間を、家系や種族、民族や階層に封じ込めてはなりません。第二に、すべての人間は、誰でも等しくもっている人間性によって、真、善、美および聖という「同じ精神的・倫理的な根本価値」へと向けられています。たしかに、異なった文化圏の間には、精神的・倫理的思想の豊かな多様性が存在します。しかし、全面的な多元論は破壊的な結果をもたらすでしょう。なぜなら、共通の根本価値を認めずして、全人類の一致は不可能だからです。第三に、すべての人間は、付与された同一の人間性に由来する、放棄しえない「同一の人権」、殊に、生存、身体保護、自由そして安全の権利を有します。だからこそ、法に基づく共同体づくりと全人類におよぶ連帯とが要請されるのです。

1979．11．2　ケルン教区大司教　ヨーゼフ・ヘフナー枢機卿

※本書は、第９刷で曄道学長の巻頭言と、
李中等教育担当理事の第Ⅴ章を追加しました。

叡智を生きる
―他者のために、他者とともに

2010年８月21日　第１版第１刷発行
2011年３月24日　　第２刷発行
2011年５月20日　　第３刷発行
2012年３月30日　　第４刷発行
2013年３月27日　　第５刷発行
2014年３月28日　　第６刷発行
2015年３月25日　　第７刷発行
2016年３月25日　　第８刷発行
2017年３月25日　　第９刷発行
2018年４月１日　　第10刷発行

編　者：上智大学『叡智を生きる』刊行委員会

発行者：佐久間　　勤
発　行：Sophia University Press
上智大学出版
〒102-8554　東京都千代田区紀尾井町7-1
URL：http://www.sophia.ac.jp/

制作・発売　㈱ぎょうせい
〒136-8575　東京都江東区新木場1-18-11
TEL　03-6892-6666　FAX　03-6892-6925
フリーコール　0120-953-431
〈検印省略〉　URL：https://gyosei.jp

©Ed. The Publication Committee of "An Unending Quest", Sophia University, 2010 Printed in Japan

印刷・製本　ぎょうせいデジタル㈱
ISBN978-4-324-09050-3
(5300144-00-000)
［略号：(上智) 叡智を生きる］
NDC 分類377.28

本書は、環境に配慮して、本文には再生紙を使用しています。